

野田中学校に3年目のSS先生と2年目のY先生がいる。20代カルテットのうちの2人である。「職能発達上の変化は3年目までに生起する」という言葉がある。機会あるたびに、若い先生方の前で、この言葉を紹介してきた。要するに、3年目までが大事だということである。3年目までで伸びる角度が決まる。この角度が重要である。角度の違いにより、1年目は一緒にスタートしたはずなのに、10年目、20年目と、ものすごい差が生まれてしまう。

3年目のSS先生と2年目のY先生にとっては、野田中学校に勤務する間に、伸びていく角度が決まってしまうということである。いかに最初に赴任した学校が重要であるかということである。

SS先生は、昨年度「逆向き設計理論」に基づく授業実践について研究し、発表もした。簡潔でわかりやすい内容だった。ポイントがわかっているということだろう。そして、3年目の今年度も継続して研究をすることとなった。今年度も発表の機会を得た。慣れてきたのか、堂々として余裕も感じられた。まだ、20代半ばの3年目の教員である。

2年目のY先生は、「ジグソー学習」を取り入れた授業実践について研究し、発表もした。彼には、生徒にこうなってほしい、こんな授業をしたいという明確なものがある。発表を聞いた。明るく力強かった。内容も、ポイントが絞られ、わかりやすかった。研究が自分のものになっているという印象を受けた。まだ、2年目の教員である。

2人ともすばらしかった。自分の2年目と比べてみた。月とすっぽんである。若かりし頃の自分が恥ずかしい。2人には思いがある。これが重要である。思いの強さが、行動を引き起こす。だから、2人の授業は魅力的である。常に工夫しようとしている。

研究作品としてまとめることも、発表のためのプレゼン資料をつくることも、容易なことではない。誰にでもできるかという、そんなことはない。一度も経験せずに、教壇を去る教員の方が多いくらいだろう。

SS先生の発表もY先生の発表も、親のような気持ちで聞いていた。心配しているのは、こちらの問題で、二人は立派に自立している。10年後、20年後と、二人は、どんな先生になっているのだろう。どんな授業をしているのだろう。楽しみである。ぜひ見てみたい。

2人を見ていると、昔の自分とは圧倒的な差を感じる。では、自分はどうしてきたのか。頼まれごととは試されごとの如く、言われたことを断らず、その度ごとにベストを尽くしてきたということだろうか。自分では何もできないが、まわりの方々に育てていただいたということに、改めて気づかされた。2人は、すでに自分で伸びていくことができている。これからは、まわりの方々からの働きかけも増えていくことだろう。

もう戻れはしないが、2年目と3年目が、いかに教員人生にとって大切であったかを考えさせられた。SS先生とY先生には、感謝している。2人からは、十分な刺激をいただいた。2人の成長と活躍をいつまでも願っている。